

## 郷土史話

## 中野泰行翁の思い出

清原貞雄

中野泰行と云つても一般の人は殆んど知らないかもしれないけれども然し杵築の人、及び和歌の道を進つた人にはよく知られて居る。即ち歌人としては県下では有名である。数十年前に物故したのであるが、県下に門人六百と云われて居るから今も相当に健在の人があろう。奇人と云う程では無いが大分變つた所があつたので、少しく話して見るのも一部の人には多少の興味があるかも知れぬ。

実は翁は私の祖父なのである。即ち私の母は翁の長女であつたのである。それ故私は翁の性行に就いては、外に知られて居ない事を幾らか知つて居るわけである。それで私は翁と云わず祖父と呼ぶ事にする。

祖父は物集高世先生の高弟で所謂四天王の一人であつた。序でに高世先生に就いて一寸触れて置く。此頃高世先生の書又は画の偽物が相当出て居る。先生の書は一風變つて居つて容易に真似難く、偽物はすぐわかる。問題は画の方である。国学者として傑れて居つた事は誰も知つて居るが、画の方はホンの余技位に考えて大したものでは無いと思ふ人が多いら

しく、実にまづい画を書いて先生のものと稱して居るのを見受ける。之は大変な間違いで、先生の画はどうして仲々立派なもの、画家としても一家を成して居る程のものである。先生の揮毫と稱するものに接せられた時の参考までに云つて置く次才である。高世先生と子息高見翁との墓は実に立派な且つ大きなものが杵築の養徳寺にある。所が今は見る影もなく荒れ果てゝ居る。孫の高量氏が東京に在住して居るが、数十年全く顧みないそうで、見兼ねた有志が何度か上京して修理を勧告しても相手にしないと云う。高世先生及び高見翁には気の毒である。なま中大きな墓を建てる事は、其の子孫の心掛次才では却つて徳を汚す事になると云う事をつくづく感じ

さて祖父であるが、祖父は文字通り天衣無縫、全く小供の様な人であつた。晩年特にそうであつたが、俗に云う再び稚な子と云うのでは無く、天性そうであつた。それだけ附近の人々からは心から愛せられて居つた。祖父は夏豆の若いのを飯に煮込んだのが大変好物であつた。夏豆の実が入る頃になると、毎日近所の畑を見廻つて、夏豆の莢を一々つまんで見て頃合いに熟したのがあると其の畑の持主の所に、あなたの畑の夏豆が丁度よい頃になつたと報告する。すると其の畑の持主は喜んで直ちにそれを祖父の所に届ける。之は毎年の事であつた。祖父のつれあい、即ち私の外祖母は六十位で亡くなつたので、それ以来長くやもめであつたが、長女である私の

母を大変愛して居つて、夕食後はあまり遠くない私の家に毎晩遊びに来た。私の父も早世したので私の家には私の母と、私の家内が弱い子供の養生のために私から離れて杵築に帰つて私の母と暮して居つた。雑談の後は必ず歌の講釈が始まる大抵百人一首の講義である。祖父は終始目を閉ぢて居る。私の家内が読むのを聞いてそれを講義する。私の母は度々聞かされるので面白くなく、やがて居眠りを始める。目を閉ぢて居る祖父は何も知らず、何時までも続ける。私の家内は眠るわけにもいかず、閉口したと今も笑話の種である。

書は仲々達者であり枯れた良い字であつたが、天性のトンキョウでよく字を書落す癖があつた。長歌が得意でよく詠んだが、長いものを書くとき必ず脱字するのが常で、完全に書いたのは珍らしい位であつた。八十歳の時に、門人百五十人が集つて賀宴を杵築の飛松館で開いたが、其の時の謝辞の長歌は全唐紙一杯の長いものである。何枚も書いたのであろうが其の内一枚、一字も落さず完全に書いたのがあつた。祖父として珍らしいと云うので之は誰にも与えず、私の帰省を待つて私に呉れた。最愛の長女の長男であつたからか、私も祖父からは大変愛せられて居つたのである。

愛すると云えば祖父は一人妙な男を愛して居つた。車夫で正直者ではあるが短気者で喧嘩が強く、皆から恐れられて居つた男である。どう云うわけか此の男が大変気に入つて、車

に乗るのは此の男の車に限られて居つた。所が此の男が過つて車を倒し、祖父は一間程の崖から田に落ちた。之が死病の元となつて八十二歳で長逝したのである。死んだ時、世の中に恐ろしい者は無いと云う風の其の男が、祖父の死骸に取りすがつて人目も構わず大声で泣いて止まなかつた。子供の様な祖父を其の男はひどく敬愛して居つたのである。所謂性が合うと云うのであろう。

祖父は若い頃仲々美男であつたそうである。そう云えば八十歳になつても豊かな頬と高い鼻とで、画に描いたえびす様によく似て居つて、若い時の美貌を思わせるものがあつた。まだ親が生きて居つた頃、親子で神官を勤めて居つて毎年天神祭りには交る／＼奉仕した。天神社から城の鼻の御旅所まで神幸があるので、神官は馬上で御供をするのである。祭りの日になると、娘達の間には親か子かと云う事が問題になる。子だと聞くとワーツと沸き立つて争うて其の馬上姿を見に行つたものだそうなる。其のためかどうか、相当のドン・フワンであつたらしい。私が高等学校の生徒の頃、休暇に帰つた時、祖父に向つてこんな質問をした事がある。「年寄りは今頃の若い者は、と云つて今をけなし、昔を讃めるのが癖であるが實際はどうですか、昔は農村の青年男女の間も相当に自由であつたと聞く、今頃は青年団や処女会が出来て昔よりはよくなつて居るのではないですか」と。之に対して祖父

は「そりやもう今の方がよくなつた。わし達の若い頃は随分自由じやつた。わしも若い時はよくあつちこつちの娘の家に泊りに行つたもんじや」。之が年頃を前に置いての話である全く天衣無縫とは此の事であろう。何人からも愛せられたのも宜べなるかなと思われるのである。

## 別府の地獄の鬼由来、その他

後 藤 武 夫

別府温泉の鉄輪附近には鬼の岩屋とか鬼のかくれ岩、鬼の躰あめとか云つて、鬼に関する伝説遺址と商業上の食品名がいろ／＼ある。熱湯の沸騰する池や穴を、焦熱地獄（略して地獄）と云う。地獄の鬼とは仏教思想が生んだものであると思ふが、教諭思想に附会した地獄、地獄に附会した鬼等を考察するとき、まんざら歴史的根拠の無いものでない。

殊に名高いのは鬼山地獄である。鬼山地獄の事は、元禄の昔、貝原益軒先生も「鉄輪村の西の山際所々に、地獄と称する処多し、鬼山と称するは古き穴ありて下り見る。其穴の底熱湯のわく事、其音恰も雷の響の如し。其西の山際に海の地獄とて池あり」と書かれている。もとの鬼山地獄案内者の説明は面白く、伝説をのべていた。

「むかし／＼大昔、この鬼山地獄の辺には、熱い湯の湧く

赤・白・黒・青・黄等の五色の池があつて、池の周りにはそれ／＼五色の鬼共の群が棲んでいました。互いに勢力争いの戦を起したり、時々里に降りて来ては人を喰うので、里の人々は怖ぢ畏れました。それで鶴見の火男火女の神様に鬼退治を鶴見の里人等がお願いしたところ、神様は鬼どもに對して、百日間に池を埋めて近江の国へ立去れ、然らずば地獄に落すと申渡しました。鬼共は神様に對して詫証文を差上げ、大石小石を拾つて来て、一生懸命に池を埋めましたが、熱い湯の吹き出す力の方が強いので、どうしても埋まりません。とう／＼百日の日限が切れたので、神様は天から火の雨・火の風大石・小石を落して地獄の底深く鬼共を埋込んでしまいました。それで此の辺を鬼山部落と云い、一つ残つたこの地獄を鬼山地獄と云います」。そして、これは鬼の書いた詫証文、これは地獄から現われた鬼の骨などと云つて、説明していた今は経営者も代つて南洋の鰐を養殖して現代的理想経営と文化的説明を行つている、別府の一大名所である。

鬼と云う詞や思想は、仏教と共に中国・朝鮮から我国に渡つて来たもので、仏教渡来以前の我国には詞はない。歴史の上に初めて鬼が現われたのは、筑前の朝倉山で、斉明天皇がお崩れになつた時である。

当時新羅や百濟から我国に帰化した民族は大抵、王仁・和邇・鬼などと呼ばれたので、みな筑紫や、豊の国に置かれて